

2020/04/27

「罪のからくり」

私たちが意識できる「顕在意識」の下には、自分では意識することにできない「潜在意識」があり、この「潜在意識」の中に私たちを不安にさせる要因があります。ただし、自分で意識できないので、何が自分を苦しめているのか、なぜ自分は不安になるのか、なぜ罪を犯してしまうのか、自分ではわかりません。しかし、聖書は、この苦しみの原因と対処方法について、初めから教えてくれています。

■「下がれ。サタン。」

「その時から、イエス・キリストは、ご自分がエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえらなければならないことを弟子たちに示し始められた。するとペテロは、イエスを引き寄せて、いさめ始めた。「主よ。神の御恵みがありますように。そんなことが、あなたに起こるはずはありません。」しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下がれ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」(マタイ 16:21-23)

「下がれ、サタン」とは、イエス様が弟子に対して使った中で、最も厳しい言葉です。イエス様がこう言った理由は、ペテロが「神のことを思わないで人のことを思っていた」からです。ペテロからすれば、イエス様のために良かれと思って進言したのですが、神のことよりも「人がどう思うか」を優先したことが問題なのです。

アドラーという心理学者は、「人を動かす運動は 100%承認欲求だ」と言いました。承認欲求とは、「愛されたい、人から良く思われたい」という欲求です。この欲求は、まさに「神のことを思わないで人のことを思うこと」であり、神が最も忌み嫌うことです。つまり、すべての人が持っている承認欲求は、神の目には罪なのです。もしあなたが、自分の行いに、神よりも自分や人を思う動機が潜んでいることに気づくなら幸いです。

どんなに人に親切にしても、人から見て立派な行為でも、そこに「人から良く思われたい」という思いがあるなら、それは、愛ではなく偽善だと聖書は教えています。なぜなら、それが神の言葉をふさいでしまうからです。

「また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。」(マタイ 12:22)

イエス様が「サタン」と言われた敵は、「この世の心づかい」すなわち「愛されようとする

欲求」のことで、「愛されよう」「人から良く思われよう」とすると、人の目を気にしたり、人と自分を比べたりするようになり、それがみことばをふさいで、罪の源となります。承認欲求は罪の入り口です。

■なぜ人は罪を犯すのか

すべての人が「愛されたい」という「承認欲求」を持っているのはなぜでしょうか。神が人をそのようにお造りになったからでしょうか。いいえ、そうではありません。もし、人に「承認欲求」を与えたのが神ならば、神が罪の創造者ということになってしまいます。そうではなく、「愛されたい」という願望は、死から生じたものだと聖書は教えています。

「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです。」（ローマ 5:12）

この聖書箇所は、文脈の理解が難しく、一般的に「アダムの子孫である私たちも、すでにアダムの中に存在しており、共にアダムの罪に参加していたため、全人類は墮落した」と理解されてきました。その結果、私たちも死という刑罰を負うようになり、神の怒りを招いているので罪を懺悔して神の赦しを請わなければならない、というのです。

しかし、その根拠とされてきた訳は間違いであることが近年明らかになりました。

新約聖書の原文はギリシャ語ですが、この古典の言語が当時どのような意味で使われていたかについては、今も研究が続けられています。ここで問題とされているのは、「エピフォー」という言葉で、長い間「それというのもの」「なぜなら」という意味であると考えられてきました。そのため、上記のような訳になったわけです。

ところが、フィッツマイヤーという人が古典文献を片っ端から調べた結果、「エピフォー」は、「その結果」という意味にしか訳せないという結論に達したのです。これは、最新の辞書にはそのように掲載されています。

この最新の研究結果を用いて先ほどの御言葉を正しく訳すと、次のような訳になります。

「それゆえ、ちょうど一人の人を通して罪が世に入り、罪を通して死が入り、まさしくそのように、全ての人たちに死が広がった。その結果、全ての人々が罪を犯すようになった。」（ローマ 5:12 私訳）

重要なことは、「私たちが罪を犯すようになったのは、死が入り込んだ結果である」と聖書が教えているという事実です。人には初めから罪を犯す性質があったわけではなく、神は罪の創造者ではありません。あなたが罪を犯すのは、死が入り込んだせいであり、あなた自身に問題があったわけではないのです。

「全人類はアダムと共に罪を犯した」などという間違っただ解釈が生まれたのは、「自分が罪を犯すのは自分の中に悪い欲望があったからだ」という、自分の経験を人々が優先したからです。そうして、「つまり、パウロが言いたかったのはこういうことだろう」と、訳を変えてしまったのです。

確かに欲望は罪の引き金です。しかし、問題は、なぜ欲望が起きるのかという点です。それは死が原因です。先ほどの御言葉の続きからも、それを理解することができます。

「それは、罪が死によって支配したように、恵みが、私たちの主イエス・キリストにより、義の賜物によって支配し、永遠のいのちを得させるためなのです。」

(ローマ 5:21)

「死によって罪が我々を支配した」という前提で話が続いているということは、「全ての人たちに死が広がった結果、全ての人が罪を犯すようになった。」(ローマ 5:12) と訳さない限り、文脈が成り立ちません。さらにこの手紙は次のように展開します。

「なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。」(ローマ 8:2)

「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと平安です。」(ローマ 8:6)

「罪と死の原理」とは、私たちの罪は死によって生じているということです。そして、「肉の思いは死である」という文章も、「肉の思い(=罪)」は、「死」からきているということを表しています。この文章は、ギリシャ語の原文では、動詞(英語でいうところのbe動詞)の省略という文法が使われており、罪と死は同じものであるということを表しています。罪を犯したら死がある、という意味ではありません。

動詞の省略は、強いインパクトを与えたいときに用いられる用法で、次の箇所でも使われています。

「死のとげは罪であり、罪の力は律法です。」(Iコリント 15:56)

これも原文は動詞が省略されており、さらにギリシャ語は強調したい言葉を先行させるものなので、この文章の主語は「罪」です。これらを踏まえると、次のような訳が考えられます。

「罪、それは死のとげ! 罪の力、それは律法!」

要するに、罪は死から生まれたものであって、人間の本性ではないということを、聖書は一貫して教えています。また、「罪の力は律法」とは、私たちの罪である「愛されたいという願望(承認欲求)」の力は律法であるということです。それは、人に愛されようと思うと、相

手の期待にこたえなければならないので、相手の期待がそのまま「ねばならない」という律法になるということです。この律法が私たちの心を支配し、人をさばくようになりました。人をさばくものさしは、罪の力によって生じたのです。こうして、人に対して怒りを覚えるようになり、様々な罪に派生するようになったのです。

いずれにしても、私たちの罪、すなわち愛されたいという願望、あるいは神よりも人のことを思う思いは、死から生じたものであるということを押さえておいてください。

■死とは何かを知る

では、罪の元となる「死」について、聖書はどのように定義しているのでしょうか。

「死」と言うと、ほとんどの人が肉体の死を想像しますが、重要なことは、聖書はどのような意味で使っているかということです。聖書を自分の感覚で読んでも正しく理解することはできません。これをパウロは「覆いがかかる」と表現しました。イエス様はある時、「あなたがたの『罪』と『義』と『さばき』についての理解は間違っている」と言われました。いったい誰が「この世の心遣い」を罪だと思うのでしょうか。この世界では、罪とは人に害を及ぼすことです。しかし、聖書が教える罪は、神との関わりにおけるものです。神は「ことば」ですから、御言葉をふさぐことが罪なのです。

「罪」や「死」をどのように理解するかだけにとどまらず、神のことばを理解しようとするときには、一度自分の考えを捨て、聖書はどう教えているかに立ち返りましょう。あなたがどう思うかではなく、聖書は何と教えているかが大切です。神のことばを自分で勝手に解釈すると、御言葉がわからなくなってしまいます。

では、聖書は「死」について、どのように教えているのでしょうか。

「しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べる時、あなたは必ず死ぬ。」（創世記 2:17）

神は、この実を取って食べる時、「あなたは必ず死ぬ」と言われました。では、アダムとエバがその木の実を取って食べた時、何が起きたのでしょうか。その時、起きたこと、それが「死」です。それは、今私たちが考えるような肉体の死ではありませんでした。

「死」を正確に知るために、「生」つまり、人のいのちがどのように造られたのかを確認しましょう。

■いのち～人はどのように造られたか～

「神は仰せられた。「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて。彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配するように。」神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」（創世記 1:26-27）

神は無制約な方なので、形を持っていません。ですから、「神のかたちに似せて造られた」とは、神と同じ本質を持つように造られたということです。新約聖書では、神の一部として造られたと記されています。神は良き方ですから、人も良きものとして造られたことが、ここからわかります。

「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった。」
(創世記 1:31)

これが私たちの真実な姿です。私たちの本当の姿は非常に良いものなのです。なぜなら、神に似たものであり、神と同じいのちを持っているからです。人間は他の被造物とは異なり、特別に造られた存在なのです。

「神である主は土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」(創世記 2:7)

原文では、「いのち」は複数形で、三位一体の神のいのちを表しています。神のいのちの息を吹き込んだということは、神は人にご自分のいのちを貸し出したということです。

哲学的に人をとらえると、「人とはものを考える(思惟する)精神である」と定義されます。何かを意識し、選択し、決断する、これが人間であるということです。そして、私たちが何かを意識するためには、私たちの側に普遍的な運動が必要です。その運動が元となって外側の出来事が刺激となり意識が生じるのです。つまり、私たちの精神が存在するためには、刺激を受け取る体が必要であり、その体の内側に普遍的な運動が必要だということです。この普遍的な運動をしているのが神のいのちで、神のいのちを吹き込まれたことによって生きものとなったとは、精神が活動を始めたということです。近代哲学が解明したことが、この創世記2章7節には初めから書いてあったという事実、私たちはただ驚くばかりです。

ちなみに、いのちは神によって貸し出されているものなので、私たちの肉体が朽ちると、自動的に神に返却されます。人は勝手に、魂は永遠だと想像し、死んだ後も精神が存在することを想像しますが、私たちの魂は永遠ではありません。体が滅び、いのちが返却されたら、体といのちに支えられていた精神は存在することはできません。ですから、肉体の滅びが、人にとっての死なのです。

死後も永遠に生きるためには、肉体が滅んだ後に魂の受け皿となる霊のからだが必要です。ですから、神を信じた時、私たちには霊のからだを着せられたと聖書は教えています。これが永遠のいのちです。今、私たちは肉の体と永遠のいのちの両方を持っています。

さて、神が土地のちりで人を造ったとき、そのからは滅びるものではありませんでした。神から貸し出された魂もからだも永遠性だったので、魂の普遍的な運動もからだは受ける刺

激も永遠性で矛盾がなく、人には平安しかありませんでした。

「人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。」

(創世記 2:25)

「恥ずかしいと思わなかった」とは、どういうことでしょうか。それは、この時、人に「愛されたい」という欲求はなかったということです。「人から良く思われたい」という思いがなければ、「恥ずかしい」という感情は生じません。つまり、造られた当初、人は「承認欲求」を持っていなかったということです。それは、神との交わりによって当たり前のように愛を受け取っていたため、そのような願望が生じる余地がなかったということでしょう。

■神と異なる思いを持った時に何が起きたか

「さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」(創世記 3:1)

「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」(創世記 3:4-5)

「狡猾」とありますが、「もっとも賢い生きもの」とも訳されています。現代でも人の言葉や感情を理解する賢い動物がペットとして飼われたりしていますが、蛇もそのように人と親しく交わることができる賢い生きものだったのです。悪魔がその蛇を使って、「食べても大丈夫だ」と言わせたので、普段から仲良しの蛇が言ったことばを人は信じてしまいました。こうして彼らは、神と異なる思いを、神の思いだと信じてその実を食べました。しかし、この「神と異なる思い」こそが「罪」だったのです。神と異なる思いを持った時に起きたこと、それが「死」です。

「そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」(創世記 3:6-7)

「食べたら死ぬ」と言われていた実を食べた時、人は「自分が裸だと知り、恥ずかしく思い」、そして、恥ずかしい自分を隠し、自分を良く見せようとして「腰のおおいを作り」ました。私たちの「承認欲求」は、ここから始まっています。

「ふたりの目は開かれ」とは、神が見えなくなった状態を表しています。というのも、神と人は一つ思いを持つように造られており、神と異なる思いを持ったことによって、その関係は崩壊しました。こうして人は神が見えなくなり、神と関われなくなってしまったのです。これが、聖書が教える「死」です。

「また、人に仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」(創世記 3:17-19)

神との関わりを失った人間は、有限性になりました。それまでは神が養ってくれていましたが、永遠性である神は有限性のものと接点を持つことはできず、神は人を養うことができなくなりました。また、人のゆえに被造物も有限性になり、それぞれ自分達で食べ物を確保しなければならなくなりました。その結果、人は汗水流して糧を得なければならなくなり、動物は互いに捕食し合う食物連鎖が生まれました。これは決して、神が罰としてのろったことではなく、罪の結果、死が入り、神と交わることができない有限性になってしまったためです。獣やウィルスが人を襲うのも、神がそのように造ったわけではなく、神と異なる思いを抱いたことによって死が入り、有限性になってしまったために変わってしまったのです。

■イエスは罪人を招くために来た

「イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」(マタイ 9:12-13)

多くの方は、罪を犯す自分を見て、自分はダメな人間だと思い、もっと人から良く思われるようになろう、愛される者になろうと思います。しかし、人はダメな者だから罪を犯すのではありません。ダメなものではありませんから、良く思われよう、愛されようとする必要もありません。神にとってあなたは良きものであり、あなたは初めから愛されているのです。

私たちが憎むべきものは、「死」です。神はコロナウィルスを通して罰を与えたり、人を訓練したりしようとしているわけではありません。人は神にとってさばきの対象ではなく、いやしの対象です。そのためにイエス様は十字架に架かられたのです。イエス様は十字架を通して、次のことを教えておられます。

1. あなたを無条件で愛している

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」

(ローマ 5:8)

人間の愛は、自分にとって愛する条件を持った対象を探して愛します。しかし神は、あなたが罪人かどうかに関係なく、あなたを愛します。イエス様は、そのことを教えるために十字架に架かったのです。

2. 罪は死による病気

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされた（る）のです。」(Iペテロ 2:24)

罪は病気です。ですから、あなたはただ神の治療を受けていやされればよいのです。

3. 悪魔を滅ぼす

誰もが罪を犯した自分が裁かれるのだと思い込んでいますが、神には、肉体の死と同時に滅ぶ私たちが裁く必要性がありません。放置すれば滅んでしまう人間は、神にとって裁きの対象ではなく救いの対象です。神が裁くのは悪魔です。

「さばきについてとは、この世を支配する者がさばかれたからです。」(ヨハネ 16:11)
「だれかが、わたしの言うことを聞いてそれを守らなくても、わたしはその人をさばきません。わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです。」

(ヨハネ 12:47-48)

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。」(ヘブル 2:14-15)

イエス・キリストが十字架に架かったのは、死の恐怖の奴隷となって苦しんでいる私たちを助け出すためです。私たちを助けようと、神が差し伸べておられる御手につかまるなら、イエス様の十字架によっていやされます。それ以外に救いの道はありません。

イエス様が「下がれ。サタン。」と言われたのは、悪魔によって運び込まれた承認欲求に対してです。そして、それを取り除いてあなたを助けるために、イエス様は十字架に架かられたのです。